

青梅市文化財ニュース

第207号

平成17年1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 0428-23-6859）

大荷田丘陵の鳥類センサス調査

ある地域に生息する鳥類の種類数や個体数を調べる方法の一つに、「センサス法」と呼ばれるものがあります。この方法は、調査ルート、調査時間、歩行速度、観察幅、その他幾つかの調査条件を一定にして調査地を歩き、確認できる全ての鳥類の種類や個体数をカウントしていくものです。集計された鳥類の数は多くの場合、1時間あたりあるいは1km当たりの出現個体数として表します。ある地域に、実際に何羽の鳥類が生息しているかを示す絶対的な数字ではなく、相対的な出現数ということになります。

青梅市の南東部に広がる大荷田丘陵で、平成15年(2003)2月から平成16年(2004)12月までの約2年間、月1回の割合でセンサス調査を行いました。調査ルートには、大荷田川沿いの既設の道路(市道)を用いています。この調査で得られた月毎の全種を合計した1時間当たり出現個体数を、以下にまとめてみました。単位は、羽/1時間で、()内はセンサス調査で確認された鳥類の種類数です。

	H15(2003)	H16(2004)		H15(2003)	H16(2004)
1月	未調査	112.3(19)	7月	55.3(17)	46.6(12)
2月	64.5(27)	58.9(19)	8月	45.7(13)	58.8(12)
3月	78.6(25)	66.8(22)	9月	46.9(15)	50.9(13)
4月	71.8(25)	58.2(23)	10月	45.8(15)	47.5(20)
5月	73.2(24)	59.3(16)	11月	68.1(18)	57.6(16)
6月	62.2(19)	71.6(16)	12月	110.1(23)	67.2(24)

(裏面に続く)

平成15年も平成16年も、年間を通しての出現個体数の変化は似たパターンを示します。出現個体数は、晩秋から冬期にかけて増加し、秋期に減少します。種類数の変化にも、ほぼ同様の傾向が見られます。これは、冬になると群れを作る野鳥が多くなり、暖かく、食べ物や水の豊富な越冬条件のよい地域に集中するためです。こうした通年変化は、大荷田だけではなく、青梅周辺の丘陵地の一般的な傾向でもあります。

平成15年の夏は涼しい夏といわれ、平成16年は逆に暑い夏になりました。その年や前の年の気候が、動物や植物の繁殖・成長に影響を与えることがあります。大荷田での鳥類の繁殖期はほぼ4月頃から7月頃ですが、この時期の出現個体数は、6月以外、平成15年の方が高い値を示します。一つの可能性として、涼しい平成15年の夏にヒナの生育が悪く、翌年の夏の繁殖活動が低下したということではないでしょうか。こうしたことを考えるには、種類毎の記録を検討することも必要になります。

(文責 櫻岡幸治)